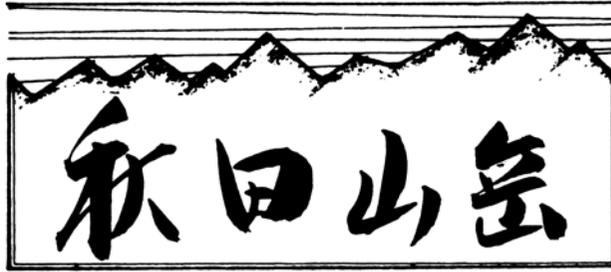


2025



J・A・C



令和7年5月 発行

No. 133

社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市外旭川八幡田
2-1-9 小松方

TEL・018-868-5445

発行者 佐藤和志

編集者 高橋雄悦

令和7年度総会開く



支部山行は2回 新年度事業計画など承認

令和7年度通常総会が四月二十二日(火)、秋田市大町の協働大町ビルで開かれ、令和六年度事業報告、七年度事業計画案のほか、八年度に本県で開かれる第三十九回東北・北海道地区集会の開催計画案など計四件をいずれも原案通り承認した。会員十五人が出席した。冒頭、佐藤和志支部長があいさつ。「昨年度は創立六十五周年記念式典を行うことができ、歴史ある

会であることを再認識できた。皆さんの協力で記念事業の一環として『六十五座ラリー』に取り組んでもらったが、把握した山の状況については市町村に情報提供することも大切ではないか。若い人に山に登ってもらうには山の環境整備が必要であり、普段山に行っている皆さんの取り組みが大きな力となつて、地域に山岳会の存在を評価してもらふことにつながる」と述べた。

引き続き、鎌田倫夫副支部長を議長に選出して議事を進行した。案件一は令和六年度事業報告。主な事業として、支部山行は母谷山(六月)で実施、初の試みとして「ゆつくり山行」を寒風山(六月)、房住山(九月)で行った。十一月には支部設立六十五周年記念式典・懇親会を開いた。公益的事業では太平山野田コースとザ・ブリーンコースの登山道整備に参加(いずれも有志)。また創立六十五周年を記念して六十五座ラリーを今年で実施した。案件二は六年度決算および監査報告で異議なく承認された。案件三―一の七年度事業計画では春の支部山行を五月ごろ、山の



日山行を八月ごろ、秋の支部山行を十月ごろに実施する予定。ゆつくり山行は二回計画している。公益的事業として大平山の歩道整備に有志が参加予定とした。案件三―二として「第三十九回東北・北海道地区集会2026イ・秋田」実施計画案について現段階の予定を説明。七月十日(金)に大瀧村のサンルール大瀧で記念講演と懇親会を開き、翌十一日(土)は寒風山ジオパークウォーキングコースで登山を実施する。案件四の七年度予算案は異議なく承認された。懇親会は鎌田副支部長の挨拶を兼ねた発声で乾杯。参加者は再会を喜びながら旧交を温め合い鈴木



展示された六十五座ラリーの山行写真

裕子顧問の締めでお開きとなった。懇親会に先立ち、ゲストとして日本山岳修験学会会員の佐藤成樹氏（団体職員、秋田市）が「菅江真澄の歩いた道〜太平山の古道と石像〜野田口編」と題して講演した。長年にわたる実地踏査を通じて近世の貴重な板碑や石碑が自然災害等で失われている現状を紹介。貴重な歴史遺産を記録し、次の世代に伝えていくことの必要性を訴えた。

総会会場の一角には、六十五座ラリーに参加した会員が山頂で撮影した「証拠写真」を事務局が取りまとめ、模造紙に貼り付けて展示した。参加者は高山あり低山ありの多彩な山行写真に見入り、自

身も以前、登頂したことのある懐かしい山頂の光景を見つけては過去の山行を懐かしんでいた。

芳志

三千元 今野昌雄 鈴木裕子
二千五百円 佐々木民秀
高橋 守

お酒 佐藤和志

出席者

佐藤和志 佐々木民秀
高橋 守 柳田勇悦
鈴木裕子 鎌田倫夫
佐藤 博 大橋忠雄
柴田 勤 後藤浩二
佐藤英實 三浦昭男
高橋吉一 小松芳美
高橋雄悦

永年会員

おめでとーいっす

真坂 洋一 会員（由利本荘市）
No.七七八五
三浦 俊雄 会員（由利本荘市）
No.七七八七
堀 等 会員（秋田市）
No.七八八二
高橋 守 会員（秋田市）
No.七八九〇
昭和五十年入会、令和六年度で在籍満五十年となりました。

年次晩餐会に参加して

佐々木 民秀

恒例の年次晩餐会は、去る十二月七日午後六時より、会員三百二十九名の出席のもとに新宿・京王プラザホテルに於いて開催。晩餐会に先立って開催された記念講演会には、本年も天皇陛下が一会員としてご臨席下さった。

橋本会長の挨拶の後、物故会員への黙祷、新永年会員（秋田支部から高橋守会員がお孫さん同伴）と新入会員の紹介等と進み、秩父宮記念山岳賞受賞者（酒井治考氏、中村浩志氏）を紹介した後、新永年会員となった高原三平・元理事



高橋守氏 元副会長神崎忠男氏 筆者

の乾杯の発声で開宴となった。

小生は自然保護関連のテーブルに着席し、宮城の紫崎元支部長始め旧知の方々と久々の再会を懐かしんだ。恒例の賑やかな各支部の紹介の後、午後九時頃散会した。

尚、二次会として（上階で）同好会のアルピニズムクラブ（代表・神崎忠雄）の集いに今野顧問と参加、更なる親交を深め合った。

翌八日、同クラブ員二十数名が皇居前に集い、晴天の下に紅葉盛りの皇居庭園を散策し、市ヶ谷の私学会館で昼食会の後散会した。

参加者

高橋 守 今野昌雄 佐々木民秀

会務報告

○会計監査 三月三十一日、泉地区コミュニティセンター。令和六年度会計収支決算監査。

出席者

鎌田倫夫 小松芳美
後藤浩二 大橋忠雄

○事務局会議 三月三十一日、泉地区コミュニティセンター。総会資料の封入作業ほか。

出席者

鎌田倫夫 小松芳美
後藤浩二 三浦昭男
高橋雄悦

会員の動静

退会 佐々木悦子（家族会員、三月三十一日付）

追悼 高橋忠雄氏を偲ぶ 佐々木民秀

高橋 忠雄氏

昭和八年七月五日生
平成七年五月日本山岳会入会
No.一二〇〇三
平成十五年〜平成十九年監事
令和六年七月十七日逝去
(享年九十二才)



月日の去るのは早いもの、高橋忠雄さんが逝去されて、早や一年になろうとしている。昨年冬頃から入院されていた秋田市飯島の緑ヶ丘病院で、誤嚥性肺炎を発症し、あえなく亡くなってしまった、とのことを奥さんからの電話で知らされた。誠に残念な事で、また一人旧知の岳友が去ってしまった。高橋さんは、人一倍人望に篤く温厚で、物静かに何時も笑顔で接して下さり、支部活動に於いても、

特段のご支援・尽力をして頂いた経緯があり、心から感謝の意を表しておきたい。

高橋さんと初めてお会いしたのは、昭和三十五年正月の太平山前岳(女人堂)で、単独で来ての初顔合わせであった。

お互いに意気投合し、その年の九月には乳頭山から岩手山までを仲間四人で縦走したこと、同四十年には汽車とバスを乗り継いで真昼岳に登り、赤倉口の近くの牧場で牛乳を一升瓶に入れて買ってきたことなどが懐かしい。

その後の高橋さんは、県内の組合総合病院の医療事務の業務に専念され、山から遠ざかっていたが、定年退職の折りに入会され、その翌年に実施されたボルネオ島・キナバル山を皮切りに、台湾の玉山・雪山・秀姑巒山や、韓国の雪山・五台山・月出山のほか中国の長白山やヒマラヤトレックなど国内外の支部山行などには積極的参加され、大いに盛り上げて頂いた。

また、支部の監事役としても、平成十一年から十九年間の長きに渡って担当され、支部発展に貢献

されて来たことなどは周知の通りである。

最後に、公私共に長い間の親交に改めて感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。(合掌)

※なお、高橋さんは平成二十六年に医療事務の功績で厚生労働大臣賞を受賞なされております。

追悼 鎌田倫夫

当方が日本山岳会に入会して間もない一九九六年、東南アジアの最高峰ボルネオ島キナバル山への遠征登山の企画が秋田支部にあり、一緒に参加した。

これを機会に親しくお付き合いをさせていただくようになったのだが、いつも温厚で思いやりのあるお人柄だった。

時々電話で連絡をしたが、奥様の対応がとてども丁寧でいつも恐縮していた。

一昨年の通常総会に出席された時にお見かけしたのが最後となってしまった。昨年二月頃に体調を崩したとのことで、心配していたが、登山を休んで自宅でゆっくり休まれておられるのだろうかと思っていた。とても残念である。安らかなご冥福を心からお祈りいたします。(合掌)

訃報

堀井 弘氏 支部顧問

No.一七八五、平成六年入会

仙台市で病氣療養中のところ、

令和七年一月三十一日逝去

されました(享年八十九才)

秋田支部からお花をお届け致しました。

山川 博氏

No.一〇四〇三、昭和六十三年入会

病氣療養中のところ、

令和七年四月十一日逝去

されました(享年八十七才)

ご遺族は弔電・献花等ご辞退なさいました。

後日、佐々木顧問が献花を致しております。

第一回役員会を開催

二月十四日(金)、秋田市北部市民サービスセンターで。六年度活動状況と七年度活動計画の確認、秋田支部主催で八年度開催予定の「第三十九回東北北海道地区集会」準備状況の報告、定例総会提出の前年度事業報告、新年度事業計画案など協議。

出席者 佐藤和志 鎌田倫夫

小松芳美 後藤浩二

三浦昭男 高橋雄悦

会長ヒアリング参加報告

小松 芳美

二月二十五日午後七時三十分から八時まで、報告済みの「令和七年度事業計画」に基づき、秋田支部対象の橋本会長ヒアリングがオンラインで行われた。

秋田支部からは私と高橋雄悦委員が、本会からは会長・副会長・常務理事・監事六名が出席した。

進行は支部からの事業計画案の説明、本会役員からの質問、打開策の検討となった。

ヒアリングの重点は、会員減少・高齢化・魅力ある支部活動・安全登山・公益活動であった。

秋田支部は会員四十一名、平均年齢七十六歳と高齢化が進み、活動が低調気味で新会員の入会が停滞するという悪循環に陥っている。本会からは、各種会議などを通じ、打開策として、SNSなどの活用による活動の広報と周知、登山講習・市民登山・女性に人気の花の観察登山などの開催などで入会のきっかけ作りなどを示されているところである。

今回のヒアリングでは、前記事項の指導もあつた上で「秋田支部の現状にあつた打開策」を導き出すことであつた。

結論として決定打を見つけることはできなかったが、本会役員か

らは「性急に新会員獲得や活動の活発化を図るのではなく、地道に支部活動をアピールしていくのがよいかも。こちらにも応援するので、要望や意見を出してほしい」などの意見が出され、本会と秋田支部の結束強化を誓い終了した。

支部連絡会参加報告

小松 芳美

三月二十六日オンラインで行われた。要点は次の通り。

▽設立百二十周年記念事業の仕上げとなつており募金をお願いしたい。各支部では支部長が先頭に立っていただきたい。

▽令和七年度計画の目玉は、収支を安定させることである。そのためには、支部の活性化による会員増、会報のデジタル化による予算削減などが重要である。現在六百名から電子化の申し込みがある（約三千四百名は紙ベースを希望している）。電子化によりカラーで見ることが出来る。今後はスマートフォンでも見ることが出来るようアプリを改良する予定。

▽三十四番目の支部となる東京支部は四月十六日の設立総会に向けて、会員百名を目標としている。

▽今後は、支部単位を越えた「同行会」を新設し会員同士の交流の場を増やす予定。

六十五座ラリーを終えて

小松 芳美

支部設立六十五周年記念事業として行つた記念山行を振り返り、今後の会運営に資すればと思ひ筆を執つた。

▼経緯 昨年二月八日、役員会を開催した際、来年度の支部設立六十五周年の事業として、これまでも周年記念事業として行つてきた、秋田県内の山城を対象とした、五十座、五十五座、六十座ラリーにならない、六十五座ラリーはどうだろう。支部旗を入れて証拠写真を撮り、集計すればいい」と提案を受け、私が案を作つた。

▼様式作成 様式は、標高をメインとして並び替え、写真を別シートに貼り付けることとした。

▼対象の山 どの範囲の山を対象とするかが最大の問題だった。当初は秋田県内の山城を考えたが、諸般の事情を考慮して限定しないこととし、同じ山に登つた場合は、先に報告を受けた情報を採用するとして動き出した。

▼関心の高まり 掲載の一番目は、鎌田副支部長などと登つた藪山行の八宗山（秋田市）とした。二番目も藪山行の駒泣峠（由利本荘市）。当初は事務方のデータを中心に掲載したが、徐々に関心が高まり、鳥海山や日本アルプスなど

の高峰や里山も集まつた。

▼結果 六十五座ラリーでは、合計七十一座を掲載し、県外十九座、県内五十二座。標高では、二千メートル以上十一座、千メートル台二十五座、百メートル台三十五座となりました。また、七十一座の標高を単純に合計すると約八十キロメートルとなった。

▼お礼 寄せられた山行データは、どれも思い出が詰まつたもので、情報提供していただいた方、暖かく見守っていただいた方、皆々様に感謝したい。

編集後記

会報の第百三十三号をお届けする。本来は昨年十一月ごろ発行予定だったが、原稿不足でやむなく断念した。過去の会報では冬山山行の報告が満載だが、昨今の会員の年齢構成を考えるとハードルが高い。さて小松事務局長の報告にある会長ヒアリングでも会員の高齢化、活動停滞が話題になった。秋田支部には「講習会の予定があれば本部としても支援できる」と提案があつた。本会とのコラボでできることがあるのかもしれないと思う。また「秋田の高齢化を逆に強みにして活動してはどうか」との助言もあつた。本県がモデルケースになるような取り組みができれば最強なのだ。（高橋雄悦）